

公  
九  
第  
六  
二  
號  
共  
一  
冊

佐田白菊  
森山茂ヨリ差出ス  
齋藤榮

對州朝鮮交際取調書

單

作魚一併

## 竹島事件

元禄六年自年幕府の命船舩漁民比  
 年竹島より来り漁採は因幡國の人より  
 して還りしむ物より漁民四五人より來りしを  
 擧ぐり漁民少人を留て懐くして幕府より  
 中出より被二人を長崎に送り使者を遣  
 へ長崎より取返朝鮮に送り再び竹島に  
 入り玉奉りて告ぐる事由り外使を長  
 崎に遣へ漁民を名目年秋使者を  
 遣へ事を始る其畧

貴城瀕海漁岷比年行舟本國竹島竊  
 為漁採極是不可到之地也以故土官  
 詳諭國禁固告不可再而乃使渠輩盡  
 退還矣然今春亦復不顧國禁漁岷四  
 十餘口往入竹島雜然漁採由是土官  
 拘留其漁岷二人而為質於州司以為  
 一時之證故我國藩州牧速以前後事

狀馳啟 東都令彼渙氓附與敵邑以  
還本土自今而後決無容渙舩於彼島  
彌可制禁云

返書曰

敝邦海禁至嚴濱海渙民使不得出於  
外洋雖敵境之蔚陵島亦以遼遠之故  
切不許任意往來况其外乎哉今此渙  
民敢入貴界竹島致煩領送遠勤書論  
鄰好之誼宗所欣感海氓捕魚以為生  
理或不無過風漂轉之患而至越境深  
入雜然渙採法當痛懲今將犯人等依  
律科罪此後沿海等處嚴立科條各別  
申飭云

元禄七甲戌年正月返籍の事  
切符を以て先あるに  
作魚を報鮮  
の蔚陵島より言及所  
何といふあるを  
不知と此の事柄を  
なして又あるに  
作  
魚に別蔚陵島なり  
今一魚二石と云

とい幕府に啓す厚くは返稱蔚茂  
 愈の字を添く可也と又是を告任官  
 答て云候不熟く是を爲人今貴方の  
 意を心く接慰官の昔は知啓す人  
 一奉不階~~~~~兩國の海程も亦  
 方のいりもの作愈ハ朝鮮の蔚茂愈が  
 朝鮮を名を名く人ハ朝鮮彼愈と云ふ  
 して民居を多き奉久一竊は日

本の人姓来漢採すと候といも字愈  
 貴人の地がも多き事候間は貴方の  
 を添く候相定以候ハ蔚茂愈ハ興國  
 の載する電船字に地是すといも兼原  
 うはは朝鮮細く多り人の口彼愈久く  
 棄く人なり且日本の人彼愈は古播磨  
 久ハ若狭地を心く昔ハ兩國の多し是  
 一興らんとい候ハ蔚茂愈と云候

其名を稱して作爲と以て其國の地と  
 す我國爲て不滿とて又彼名を爲す所  
 すといふ所の不可成事の所を爲す名改  
 めんとせば我國辱弱なりといふも多し  
 中浦も國の陸地より身よりいふ是  
 程に使者の交して返答を交して歸る  
 中浦もいふ所の内は蔚陵のふ字  
 ありて厚く厚くいふ程に極七甲成  
 年二月又使者を遣はして改稱を和心不  
 爲の爲契と曰

我書不言蔚陵島之事今回翰有蔚陵  
 之名是難曉也只冀除却蔚陵之名惟  
 幸云

此時朝鮮書言を以てす

淑邦江原道蔚陵縣有屬島名曰蔚陵  
 島歷代相傳事跡昭然今者我國漢城

往于其島而不意

貴國之人自為犯越與之相值乃拘執  
二氓轉到江戸幸蒙

大君明察事情優加資遣可見交鄰之  
情出於尋常感激何言雖然我氓澳株  
之地本是蔚陵島而以其產竹或稱竹  
島此乃一島而二名也一島二名之狀  
非徒我國之所記 貴國之人亦皆知  
之而今此來書中乃以竹島為貴國之  
地亦欲令我國禁止澳船更往而不論

貴國之人侵涉我境拘執我氓之失不  
有欠於誠信之道乎云

因八乙亥年裁列系使者を東萊遣

糸條の疑問を役多啓答を以て期を

尅々答書を待初〜以一行の使者お儀

て候と下〜風を幸川答書高の友と

わ〜尋書を東萊に送り帆を寄〜海

此秋至真幕府に親〜竹島の本を以

て執政を啓す執政の云作忽海中に在て  
 我國を去ることを朝鮮を去ることを  
 近しきことと雖も我國渡船の往來を  
 禁ず此を以て朝鮮は昔より我が  
 元祿九年壬午年去る真海邊に候官を  
 招く其年のあつた海邊執政のまゝを以  
 て使使の面囑り候官所國の後禮費を  
 館身に修し書を候。

項因譯使回自貴州細傳 左右面托  
 之言備悉委折矣蔚陵島之為我地輿  
 圖所載文跡昭然無論彼遠此近疆界  
 自別貴國下令永不許人往澳採辭意  
 丁寧可保久遠無他良幸々々我國亦  
 當分付官吏以時檢察俾絕兩地人往  
 散雜之弊矣云

是に於て禮費の事と幕府に啓し元祿  
 十二年三月為真書を以て禮費の事



前年象官超溟之日面陳竹島之一件  
 繇是左右克諒情由示以兩國永通交  
 誼益懋誠信矣至辛々々示意即已  
 啟達了云。

右書を館寄とて東萊子信録と也